

愛着傾向と親密な関係における脅威場面での感情および

対処行動との関連

—恋人関係と夫婦関係の違いに着目して—

謝 新宇¹・中島 健一郎¹

Attachment orientations, emotions, and coping behaviors to threat in intimate relationships:
Focusing on differences between dating and marital relationships

Xinyu Xie and Ken'ichiro Nakashima

This study examined the relationship between attachment orientations (anxiety and avoidance), emotions, and coping behaviors in response to threatening situations in intimate relationships, focusing on the differences between dating (523 participants) and marital relationships (606 participants). Using a hypothetical scenario, attachment orientations, negative emotions, and coping behavioral tendencies in response to third-party interventions in intimate relationships were measured. A multiple regression analysis revealed a positive relationship between attachment anxiety and negative emotions. Regarding coping behaviors, multiple group structural equation modeling showed that attachment anxiety was positively related to aggression-oriented, silence-oriented, breakup-oriented, and rival-oriented behaviors in both dating and marital relationships. However, attachment avoidance was positively associated with silence-oriented behaviors and negatively with conversation-oriented behaviors. Additionally, differences were observed between dating and marital relationships in the relationships between attachment anxiety and conversation-oriented behaviors, as well as between attachment avoidance and rival-oriented behaviors. These results suggest that attachment anxiety and attachment avoidance lead to different nonconstructive coping behaviors.

キーワード : attachment orientation, threatening situation, emotion, coping behavior, intimate relationships

¹ 広島大学大学院人間社会科学研究科

問 題

人は基本的な帰属欲求を満たすために、人間関係を維持しようとする強い動機を持つ (Arriaga, 2013; Rusbult & Van Lange, 2003)。特に、質の高い親密な関係 (恋人関係または夫婦関係) を持つことは、身体的および精神的な健康の向上に寄与することが多くの研究で示されている (Braithwaite & Holt-Lunstad, 2017; Slatcher & Selcuk, 2017)。さらに、こうした関係は個人の幸福感の増大や人生満足度の向上とも関連している (Kawamichi et al., 2016; Gustavson et al., 2016)。

多くの人が安定した親密な関係を築き維持することを望む一方で、関係内外のさまざまな状況や出来事により、関係の質 (例: 満足度やコミットメント) が揺らぐことは避けられない (Arriaga, 2001)。親密な関係は他の対人関係 (友人関係など) と異なり、排他性という特徴を持つため、第三者がその関係にある片方に対して親密性、もしくは親近性を求めて関係内へと入り込んでくること (第三者の介入) が関係の安定性を脅かす可能性がある (金政, 2006)。特に恋人関係では、パートナーとの身体的・精神的な結びつきが比較的弱く、関係の形成や解消に伴うコストが結婚関係に比べて低いため、外部からの脅威への対応が常に求められる (Shorey et al., 2008)。一方、夫婦関係では外部の脅威に加え、夫婦で一緒に過ごす時間が比較的長くなるため、日常生活の中で生じる相互作用も関係に影響を与える要因となる。これらの相互作用は、ポジティブな行動 (例: 思いやりや感謝) から、日常的な行動 (例: 家事の分担)、さらにはネガティブな行動 (例: 不十分なサポートや対立) まで多岐にわたる。パートナーとの話し合いなど適切な対応は個人の幸福感を高め、関係の質を向上させるが、攻撃、回避など不適切な対応は関係の質を損なうことが示されている (周・深田, 2017)。しかし、誰もがこれらの脅威に適切に対応できるわけではない。

親密な関係への脅威に対する個人差を説明する要因に、成人期の愛着があげられる (Gillath et al., 2016; Crowell et al., 2016)。愛着理論は、個人の対人的な態度、感情、行動戦略など、幅広い心理的要素を包括的に説明するための枠組みを提供する (Mikulincer & Shaver, 2007)。成人期の愛着は、自己観および他者観に関する作業モデルに基づき、不安と回避という二つの次元 (愛着傾向) で特徴づけられる (Griffin & Bartholomew, 1994)。愛着不安は、他者からの受容を通じて自己を肯定的に捉えようとする傾向を反映する。不安が高い個人は、親密さを求める一方で拒絶や見捨てられることへの不安を抱え、脅威関連の手がかりに対して過敏に反応する傾向がある。一方、愛着回避は親密さへの不快感を反映しており、愛着回避の高い人は、パートナーを信頼できないと感ずるため、親密さを避け、脅威関連の手がかりから距離を置くことが多い (Mikulincer & Shaver, 2007)。

愛着理論によれば、第三者の介入などの脅威を知覚すると愛着システムが自動的に活性化される。愛着不安の高い人は過活性化方略 (hyperactivating strategy) を使用する傾向がある (古村・戸田, 2020)。具体的に、脅威に直面すると、彼らはネガティブな思考や感情へのより注意を向け、より強いネガティブな感情 (例: 悲しみ、恐れ、怒り) を経験し、それを強く表現する (Winterheld, 2016)。これにより、愛着対象 (パートナー) の注意を引き、愛着対象からの保護やサポートを求めようとする (Mikulincer & Shaver, 2016)。脅威への対処行動として、愛着不安の高い人は、パートナーとの話し合いといった建設的な行動を取らず (Fournier et al., 2011)、敵対的あるいは攻撃など非建設的

な行動を取る傾向がある (Babcock et al., 2000)。一方、愛着回避の高い人は不活性化方略 (deactivating strategy) を使用する傾向がある。彼らは脅威関連のネガティブな感情から注意を逸らす、感情を抑制する (Monti & Rudolph, 2014)。脅威への対処行動については、愛着回避の高い人は、パートナーとの対立を最小限にとどめようとし、脅威を避ける傾向がある (Collins et al., 2006)。その結果、関係を維持するための建設的な対処行動 (例：問題を解決するために対話を行う) を示す傾向が低い (Guerrero, 1998)。

しかし、愛着傾向が脅威時の感情経験および対処行動との関連を検討した先行研究では、一貫した結果が得られていない。例えば、愛着不安とネガティブな感情の高さや非建設的な行動との間に正の関連を示すものがある一方 (Mikulincer & Nachshon, 1991; Tan, Overall, & Taylor, 2012)、ネガティブな感情の低さや建設的な行動と正の関連を示すものもある (Feeney, 1995; Guerrero, 1998; Remen, Chambless, & Rodebaugh, 2002)。この不一致は、先行研究が特定の行動 (例：安心探し、攻撃、対立の最小化など) に焦点をあてており (Mikulincer & Shaver, 2005; Collins et al., 2006)、愛着傾向によって感情と行動が過活性化または不活性化されることについて包括的に検討していなかったゆえに、結論の相違が生じた可能性がある (Brandão, 2019)。したがって、Mikulincer & Shaver (2019) が論じたように、特定の状況における愛着不安および愛着回避型の高い個人が具体的にどのような反応を示すのかについて、さらなる知見が必要である。

一方、日本において、愛着傾向と脅威へのネガティブな感情及び対処行動との関連を検討した研究は限られている。田中他 (2007)、永井他 (2010)、および石毛 (2012) の研究は、愛着回避とネガティブな感情の抑制との関連を明らかにしているが、これらの研究は人々の普段の感情制御に着目しており、親密な関係における脅威場面を直接検討したものではない。また、金政 (2006) は、愛着傾向と第三者の介入による脅威に対する感情経験および対処行動との関連を検討した結果、愛着回避が脅威に対するネガティブ感情の経験と負の関連を示し、さらに「話し合い行動」という建設的行動とも負の関連のあることを明らかにした。この結果は愛着理論と一致しているが、対象者が恋人関係にある参加者に限定され、恋人関係における排他性の視点から議論されていたため、夫婦関係まで議論できなかったという限界点がある。

Xie et al. (2022) は親密な関係における暴力 (Intimate Partner Violence, IPV) が当事者間の相互作用の中にエスカレートするプロセス (相馬, 2018) に着目し、恋人関係における愛着不安の影響を検討した。その結果、愛着不安が脅威に対するネガティブな感情の高さと非建設的な対処行動 (別れ匂い傾向) を介して、心理的暴力から身体的暴力へと至るという因果プロセスを示唆する結果が得られた。さらに、Xie et al. (2023) は夫婦関係にある参加者を対象に同じプロセスが再現されることを確認した。しかし、これらの研究では暴力のエスカレートを検討対象とするために、Straus (1979) の葛藤対処尺度と神野 (2017) の浮気場面への予測行動尺度項目を組み合わせ使用したが、その尺度の信頼性と妥当性に関する証拠の報告が不十分である。加えて、両研究では愛着回避が統制変数としてモデルに含まれてるにとどまり、その影響のあり方を直接検討対象としていなかった。さらに、Xie et al. (2023) で同じプロセスが再現されたとはいえ、恋人関係と夫婦関係において一部の得点間の関連の仕方に違いが認められている。しかし、この違いについて統計的に比較しているわ

けではない。実際、冒頭で述べたように、夫婦関係では同居生活を通じた相互作用への対応が関係維持の重要な課題であると同時に、恋人関係のように第三者介入など外部からの脅威に晒される可能性もある。一方で、夫婦関係は恋人関係よりも関係の形成や解消に伴うコストも相対的に高く、パートナーとの身体的および精神的な絆が強いため (Shorey et al., 2008), 関係の安定性が高いとも考えられる。また、長時間の同居生活を経ることでパートナーへの理解が深まり、愛着傾向の影響が弱まる可能性も示唆される (Kuncewicz et al., 2020)。これらの点を踏まえると、同じように親密な関係に位置づくとはいえ、恋人関係と夫婦関係の間で愛着傾向と脅威に対する感情及び対処行動に与える影響に違いが見られる可能性が考えられる。

以上より、本研究は、Xie et al. (2023) の使用尺度よりも妥当化が進んでいる尺度を用い、愛着不安と愛着回避が親密な関係における脅威場面での感情や対処行動との関連を検証するとともに、この関連のあり方を恋愛関係と夫婦関係で比較することを目的に、Xie et al. (2022) の恋愛関係データ、および Xie et al. (2023) の夫婦関係データを再分析する。

両データの概要を以下に述べる。Xie et al. (2022) では、金政 (2006) と神野 (2017) に基づき、親密な関係への脅威として第三者の介入場面と設定した。そして、脅威に対するネガティブな感情は、神野 (2016) の多次元恋人関係嫉妬尺度を用い、脅威時に典型的に生じる感情である嫉妬 (White & Mullen, 1989) が測定された。この尺度は嫉妬を認知・情動・行動の3側面から捉えている。本研究では、第三者の介入に対するネガティブな感情の強さを示す「排他的感情」に着目する。脅威への対処行動については、尺度の信頼性と妥当性を考慮し、Xie et al. (2022) および Xie et al. (2023) で用いられた合成尺度で測定されたデータではなく、その構成元である神野 (2017) の浮気場面での予測行動尺度で測定されたデータを用いる。この尺度は以下の5つの下位因子で構成される：パートナーに対する攻撃的態度を示す「攻撃志向」、浮気場面について特に触れようとせず、また解決に出ようともしない「沈黙志向」、パートナーとの別れを積極的に考える「別れ志向」、パートナーと真摯に向き合って、話し合おうとする「対話志向」、関係に介入してきたライバルと接触する方向での解決を目指す「ライバル志向」である。

本研究の予測を以下に述べる。まず、金政 (2006) や (Winterheld, 2016) の知見より、愛着不安の高い人は親密な関係への脅威に対してより強いネガティブな感情を経験する一方で、愛着回避の高い人はネガティブな感情を抑制する傾向が高いことが想定される。これより、①愛着不安は「排他的感情」との正の関連を示す、②愛着回避は「排他的感情」と負の関連を示すと予測した。次に、(Babcock et al., 2000) や (Fournier et al., 2011) の知見より、愛着不安の高い人は、パートナーに見捨てられることへの不安が高いため、関係解消にかかわる行動をとる意欲が低いこと、そして彼らはパートナーとの会話を避け、攻撃的な態度を示すことが想定される。これより、愛着不安は「攻撃志向」との正の関連を示し、「沈黙志向」、「別れ志向」、「会話志向」、「ライバル志向」と負の関連を示すと予測した。一方、愛着回避の高い人は、親密さへの不快感を持ち、脅威への対処よりもそれを避ける傾向が高いことから (Collins et al., 2006), ④愛着回避は「沈黙志向」と正の関連を示し、「会話志向」と「ライバル志向」と負の関連を示すと予測した。さらに本研究では、ここで挙げた関連について恋人関係と夫婦関係により違いが生じるか比較する。その詳細は分析計画で後述する。

方 法

上で述べたように、本研究で使用するデータは Xie et al. (2022) の恋愛関係データおよび Xie et al. (2023) の夫婦関係データである。以下では、これらの研究手続きを紹介する。

参加者と手続き

参加者は、いずれもクラウドソーシングサービスを通じて募集した。そのうち、恋人関係をもっているまた持っていた者は 523 名（男性 308 名、女性 212 名、性別不明者 3 名、 $M_{age} = 38.67 \pm 9.00$ 歳）と（Xie et al., 2022）、夫婦関係をもっており、配偶者と同居している 606 名（男性 395 名、女性 209 名、性別不明者 2 名、 $M_{age} = 48.05 \pm 8.92$ 歳）であった（Xie et al., 2023）。

手続きは両研究で同一であった。参加者から調査参加同意を得た後、PC またはスマートフォンを通してオンライン調査（Google フォーム）に参加するよう求めた。調査では参加者の愛着傾向、日常における嫉妬経験、および性別、年齢などの人口統計変数を測定した。その後、親密な関係が脅かされている仮想場面（「あなたはとある土曜日の夜、あなたの恋人（夫婦関係の場合はパートナー）「X さん」が、あなたの知らない人物「Y さん」とデートしているように見える姿をたまたま目撃してしまいました。」）を呈示し、この脅威場面に対する対処行動傾向を測定した。この方法は神野（2017）を参考にした。

使用尺度

性別、年齢以外、以下の尺度を用いた。いずれの尺度も 7 件法で測定した（1:全くあてはまらない-7:非常によくあてはまる）。2 つのサンプルは同じ尺度を用いて測定した。

愛着傾向 一般他者版愛着スタイル尺度（中尾・加藤，2004）を用いた。この尺度は「見捨てられ不安」（例：私は、人と親密になることがとてもこちよい）と「親密性の回避」（例：私は人とあまり親密にならないようにしている）の 2 つの下位因子から構成されている。

嫉妬 多次元恋人関係嫉妬尺度（神野，2016）を用いた。この尺度は認知・情動・行動の 3 つの側面から嫉妬を捉え、「排他的感情」（例：X さんが誰かといちゃいちゃしていたら、不機嫌になる）、「猜疑的認知」（例：誰かに X さん（パートナー）をとられるかもしれないと考えることがある）と「警戒行動」（例：X さんに、誰と何をしていたのか、何を話していたのかを聞くことが多い）に構成される。本研究ではそのうち「排他的感情」を分析に使用した。

脅威への対処行動傾向 架空の浮気場面への予測行動尺度（神野，2017）を用いた。この尺度は、「攻撃志向」（例：X さんに意地悪なことを言う）、「沈黙志向」（例：X さんが何も言わない限り、普段通りに接する）、「別れ志向」（例：X さんに別れ話をする）、「会話志向」（例：「落ち着いてパートナーに尋ねる」）、および「ライバル志向」（例：「ライバルと会う機会を作ろうとする」）の 5 つの因子で構成されている。

分析計画

まず、脅威への対処行動尺度に対し、確認的因子分析を実施する。この尺度は神野（2017）で妥当性が検討されていたが、Xie et al.（2022）と Xie et al.（2023）で合成尺度の使用により、この尺度の妥当性の報告が十分でなかったため、その確認を目的とする。因子構造の適合度が基準（CFI \geq .90, RMSEA および SRMR \leq .10 以下）を満たさなかった場合、構造的側面の証拠が得られなかったと判断したうえで、最低限として信頼性が担保されているかを確認するために項目分析を行う。その後、各因子の項目群ごとに個人内平均値を算出し、尺度得点として相関分析を実施する。

続いて、愛着傾向と脅威に対する感情の関連を検討するため、排他的感情を目的変数、愛着不安および愛着回避を説明変数として重回帰分析を実施する。最後に、愛着傾向と対処行動の関連を検討するため、多母集団同時分析を実施する。その際のモデルは、予測で想定される関連に基づいて愛着不安と愛着回避から、各対処行動に対してパスを引く。愛着不安と愛着回避の間、および各対処行動の誤差項の間に共分散を仮定する。恋人関係と夫婦関係による違いを検討するため、弱測定不変モデル（パスおよび共分散を等値制約を設定）と、配置不変モデル（等値制約を設定しない）の両方を実施する（久保・2022）。2つのモデルについて、情報量規準（AIC と BIC）を参考に適切なモデルを選択する。

結 果

まず、架空の浮気場面への予測行動尺度に対する確認的因子分析の結果、いずれのモデルも適合度が基準を満たさなかった（恋人関係：CFI = .890, RMSEA = .075, SRMR = .072; 夫婦関係：CFI = .890, RMSEA = .082, SRMR = .082）。尺度の構造的側面の証拠が得られなかったものの、各下位尺度の信頼性が高ければ、尺度得点の算出は許容できると考え、各因子に対して項目分析を行った。その結果、信頼性係数（Cronbach の α 係数）は.68 から.89 であり、許容範囲内と判断できる水準にあることが確認された。そこで各因子の項目群ごとに個人内平均値を算出し、尺度得点とした。恋愛関係のデータと夫婦関係のデータによる各尺度の下位尺度の記述統計量および相関係数を Table 1 に示す。いずれも先行研究（Xie et al., 2022; Xie et al., 2023）では報告されていない結果である。

Table 1
各変数の記述統計量と相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	Mean	SD	α
恋人関係											
1 愛着不安	—								3.46	1.12	.92
2 愛着回避	-.02**	—							4.54	1.09	.89
3 排他的感情	.34**	.01	—						4.85	1.22	.83
4 猜疑的知覚	.51**	.17**	.46**	—					3.87	1.48	.91
5 攻撃志向	.38**	-.02	.35**	.27**	—				3.14	1.32	.84
6 沈黙志向	.12**	.13**	-.19**	.13**	-.22**	—			2.83	1.33	.88
7 別れ志向	.20**	-.02	.14**	.13**	.55**	-.19**	—		3.44	1.47	.87
8 対話志向	-.10*	-.12**	.09	-.14**	-.04	-.31**	-.18**	—	5.11	1.21	.79
9 ライバル志向	.20**	-.08	.17**	.16**	.15**	.10*	-.01	.25**	3.80	1.32	.68
夫婦関係											
1 愛着不安	—								3.27	1.01	.92
2 愛着回避	.01	—							4.23	1.00	.87
3 排他的感情	.25**	.07	—						4.26	1.39	.86
4 猜疑的知覚	.49**	.01	.43**	—					2.85	1.41	.93
5 攻撃志向	.31**	.00	.43**	.25**	—				3.12	1.42	.86
6 沈黙志向	.11**	.08*	-.16**	.08	-.21**	—			3.13	1.42	.87
7 別れ志向	.24**	.01	.24**	.28**	.62**	-.23**	—		3.18	1.55	.89
8 対話志向	-.03	-.16**	.29**	.00	.24**	-.21**	.14**	—	4.63	1.46	.85
9 ライバル志向	.24**	-.09*	.37**	.27**	.48**	-.02	.32**	.45**	3.60	1.48	.78

* $p < .05$, ** $p < .01$

次に、HAD18（清水，2016）で線形回帰分析を行い，愛着傾向と排他的感情との関連について検討した（Table 2）。その結果，恋人関係および夫婦関係の両方で，愛着不安と排他的感情との正の関

Table 2

愛着傾向と日常における排他的感情及び猜疑的認知との関連

目的変数	説明変数	恋人関係		夫婦関係	
		β	95%CI	β	95%CI
排他的感情	愛着不安	.34**	[.26, .43]	.24**	[.16, .32]
	愛着回避	.04	[-.04, .12]	.07	[-.02, .14]

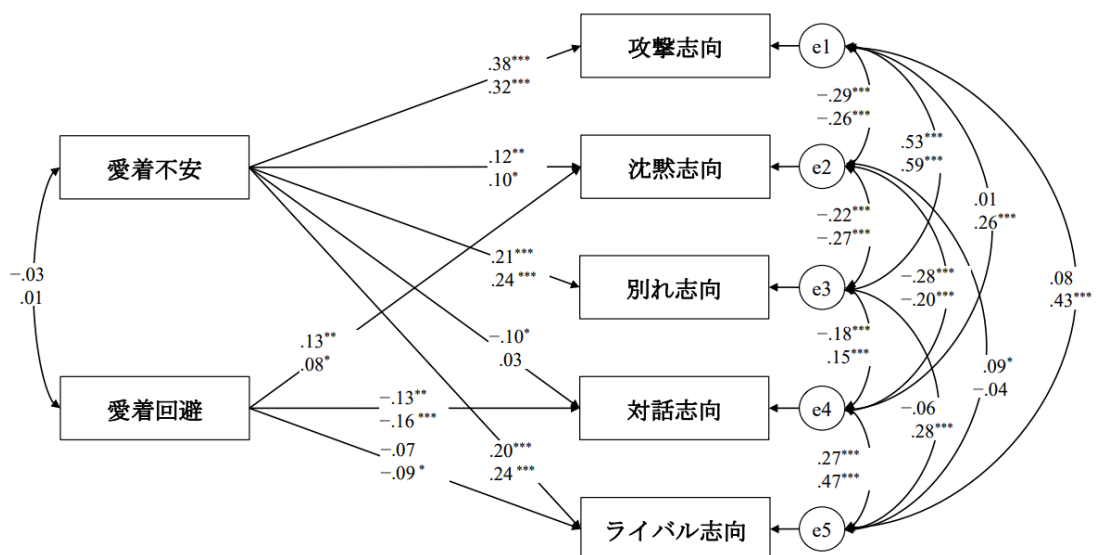
** $p < .01$

連が見られた（恋人関係： $\beta = .34, p < .01$ ；夫婦関係： $\beta = .24, p < .01$ ）。一方，愛着回避と排他的感情との間には有意な関連が見られなかった（恋人関係： $\beta = .04, ns$ ；夫婦関係： $\beta = -.00, ns$ ）。したがって，予測①は支持，予測②は不支持であった。

次いで構造方程式モデリング（SEM）を用いて愛着傾向と脅威への対処行動傾向との関連を検討した。恋人データと夫婦データに対して，Mplus8.8（Muthén & Muthén, 2017）を用いて多母集団同時分析を実施した結果，弱測定不変モデル（AIC=25013.567; BIC=25100.649）よりも，配置不変モデル（AIC=24963.624; BIC=25085.909）の情報量規準が低かったことから，後者を選択した。この結果は，恋人関係と夫婦関係において異なる関連を持つことを意味する。そして，モデルの適合度指標は CFI=1.000, RMSEA=.000, SRMR=.002 であり，基準を満たしていると判断した。

Figure 1

愛着傾向と脅威場面における行動の関連



注) 上段は恋人関係，下段は夫婦関係。標準化係数を示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

分析の結果、恋愛関係および夫婦関係の両方で、愛着不安は攻撃志向（恋人関係： $\beta = .38, p < .01$ ；夫婦関係： $\beta = .32, p < .001$ ）、沈黙志向（恋人関係： $\beta = .12, p < .01$ ；夫婦関係： $\beta = .10, p < .05$ ）、別れ志向（恋人関係： $\beta = .21, p < .001$ ；夫婦関係： $\beta = .24, p < .001$ ）およびライバル志向（恋人関係： $\beta = .20, p < .001$ ；夫婦関係： $\beta = .24, p < .001$ ）と有意な正の関連を示した。これらの結果は予測③を一部支持した。

一方、恋愛関係および夫婦関係の両方で、愛着回避は沈黙志向（恋人関係： $\beta = .13, p < .01$ ；夫婦関係： $\beta = .08, p < .05$ ）と有意な正の関連を示し、対話志向（恋人関係： $\beta = -.13, p < .01$ ；夫婦関係： $\beta = -.16, p < .001$ ）と有意な負の関連を示した。これらの結果は予測④を一部支持した。

恋人関係と夫婦関係による違いに関して、まず愛着不安と対話志向との関連については恋愛関係で有意な負の関連（ $\beta = -.11, p < .05$ ）が示されたのに対して、夫婦関係では有意ではなかった（ $\beta = .03, ns$ ）。また、愛着回避とライバル志向との関連について、夫婦関係では有意な負の関連（ $\beta = -.09, p < .01$ ）が示されたものの、恋愛関係では有意ではなかった（ $\beta = -.07, ns$ ）。

考 察

本研究は、個人の愛着傾向と外部からの脅威に対するネガティブ感情および対処行動との関連に関する予測を検証するとともに、恋愛関係と夫婦関係における関連の違いについて検討した。

まず、愛着傾向と脅威に対するネガティブ感情に関して、恋人関係と結婚関係の両方で、愛着不安は排他的感情との正の関連が見られた。これらの結果は予測①を支持し、愛着不安の高い人は過活性化方略を使用する傾向が示唆された。愛着不安の高い人は、常に自分がパートナーに愛されているかどうかについて疑念を抱きやすく、その結果として、パートナーに捨てられることを心配し続ける（Hazan & Shaver, 1987）。このような不安感、親密な関係内外の出来事に対して過剰に警戒心を持たせ、特に第三者の介入のような明確な脅威に対して、強いネガティブな感情を引き起こすことが多いと考えられる。一方で、愛着回避に関しては、排他的感情との有意な関連は見られなかった。つまり、予測②に基づく愛着回避に関連する不活性化方略は支持されなかった。先行研究（e.g., Mikulincer & Shaver, 2005）に基づくと、愛着回避の高い人が愛着回避の低い人のようにネガティブな感情を経験する可能性は低いと。その理由について現状では考察するのが難しいため、今後も関連研究を渉猟しながら、どのような理由が想定されるか考察していく必要があると考えられる。

次に、脅威場面への対処行動に関して、恋愛関係と夫婦関係の両方で、愛着不安は攻撃志向と正の関連が見られた。この結果は先行研究と一致しており（Babcock et al., 2000）、脅威に応じてパートナーへの攻撃的な行動を取る傾向が示唆された。Buss（2000）は、パートナーがほかの人に興味を示した際に相手を責め、罪悪感を抱かせるような行動には、パートナーを関係内部に引き留める機能がある可能性を指摘している。愛着不安が高い人は、見捨てられることへの不安や焦燥感が生じる状況、あるいは親密さへの希求が満たされない状況で、パートナーへの監視や束縛など間接的暴力を引き起こす傾向がある（金政他, 2017）。これらの行動は親密な関係における暴力の先行要因となる可能性が示唆される（金政他, 2021）。したがって、愛着不安を抱える人々の攻撃的な行動を

予防し、親密な関係をより健全に維持するためには、早期介入の重要性が考えられる。

しかし、予測③に反して、愛着不安は別れ志向、ライバル志向または沈黙志向と有意な正の関連が見られた。別れる行動は葛藤そのものやそれまでの関係への不満足を理由に、関係の終了を目指す行動であり、一見愛着不安の高い人が親密さを求める目的と反している。しかし、一方で、パートナーに別れ話をするなどの行動は、パートナーへの警告及び攻撃の意図も含まれる場合もある(神野, 2017)。Rusbult et al. (1996) は別れる行動を「精神的・物理的にパートナーを攻撃する」行動として捉えている。したがって、愛着不安の高い人の別れ志向は、単なる関係の終了を目指すものではなく、パートナーとの関係において不満を表明する行動の一環として理解される可能性がある。さらに、因子間共分散に着目すると、別れ志向と攻撃志向との正の相関は他の相関よりも強い。この結果は、別れ志向の攻撃的な側面、言い換えれば両者が同時に生じる傾向にあることを示唆すると考えられる。

次に、愛着不安とライバル志向との正の関連について、ライバルを調べ、接触することは、親密な関係にとって必ずしも建設的な対処行動であるとは限らない点が指摘できる(神野, 2017)。実際、愛着不安が高い人は、積極的にライバルの情報を収集したり、潜在的なライバルを特定してパートナーと遠ざけようとする敵意を示す行動をとる傾向があり、これは脅威関連の手がかりに対する過敏さの表れであると考えられる。さらに、愛着不安と沈黙志向との正の関連は、愛着不安が高い人が一時的に自分の感情を抑え込み、その感情が蓄積されることで、最終的には攻撃的な態度や行動にエスカレートする可能性を示唆している(相馬, 2018)。これらの結果は、愛着不安の高い人が脅威に対して多様な対処行動を示す傾向があることを示している。それぞれの行動は、一見異なるように見えるものの、いずれも親密な関係にとって非建設的な対処として機能している可能性がある。

愛着回避については、恋人関係と夫婦関係の両方で、沈黙志向と正の関連、対話志向と負の関連が見られた。この結果は先行研究と一致しており、愛着回避が強い人は脅威への関与意欲が低く(Collins et al., 2006)、脅威を最小限に抑えるために沈黙し、パートナーとの建設的な議論を避ける不活性化方略が示唆される。これらの行動は攻撃的な行動とは異なり、関係を直接的に傷つけるわけではない。しかし、建設的な対処行動を抑えることで問題を解決しないままとなり、間接的に関係の質を低下させる(古村・戸田, 2008)。

最後に、恋愛関係と夫婦関係による違いについて、先行研究の知見を踏まえて考察可能な部分について述べる。夫婦関係において愛着不安と対話志向との負の関連が見られなかった点について、関係の安定性や継続時間の長さから見ると、夫婦関係は恋人関係よりも安定しており、同居生活を通じて互いの理解がより深まる(Shorey et al., 2008)。このような安定した関係の中では愛着不安の高い人の欲求に応じて、パートナーから適切な対応が与えられることで、見捨てられ不安が緩和される(Kuncewicz et al., 2020)。つまり、愛着不安の高い人であっても脅威に対してパートナーと真摯に向き合い、話し合いを行おうと改善することが考えられる。

愛着傾向と脅威場面への対処行動との関連を検討した結果、愛着不安と愛着回避が外部の脅威に対して異なる非建設的な対処行動を取ることを示されている。また、関係を維持するためには、愛着傾向および関係の種類に応じた適切な支援が必要であることを示唆されている。さらに、親密な

関係であっても、恋人関係と夫婦関係によって愛着傾向の影響の強さが変わる可能性が示された。愛着傾向の影響をより明確に理解するためには、この要素を考慮に入れた検討の必要性が示唆された。

しかし、愛着傾向による過活性化方略および不活性化方略の影響を明らかにするためには、以下の限界点を踏まえてさらなる検討が必要である。一つ目は、本研究では脅威として設定した場面が第三者の介入に限定されている点が挙げられる。第三者の介入は日常生活におけるさまざまな出来事のうち、関係の外部に起因する一側面を反映するに過ぎない。したがって、本研究で得られた結果は特定の場面のみ適用できるかもしれない。また、この限定された場面は、先行研究と一致しておらず、現状では解釈できない結果が得られたことにつながった可能性がある。本研究の結果の外的妥当性に関する証拠を得るために、脅威場面の内容を増やして追加検討する必要がある。二つ目は、本研究では場面想定法を用いた方法論上の限界が挙げられる。この方法では、仮想場面での感情と行動傾向が測定されており、参加者の日常生活における脅威、または脅威に直面する際に生じた感情と行動を十分に反映しているとは言えない。実際、参加者が想像や過去の記憶に基づいて回答することにより、想起バイアスが生じる可能性が指摘されている (Huelsenitz et al., 2018)。実際の脅威場面における感情や対処行動を明らかにするためには、生態学的妥当性の高いデータを収集する必要がある (Sheinbaum et al., 2015)。その一つの方法は経験サンプリング法 (experience sampling method; SEM) である。

例えば、謝他 (2023) は経験サンプリング法を使用して、愛着傾向が日常生活におけるパートナーとの相互作用に対する個人の感情的反応と行動的反応に与える影響を調べ、その結果、女性の愛着傾向が自分のポジティブな感情反応を調整することが示された。しかし、経験サンプリング調査においては、適切なサンプルサイズの設定が重要な課題となる (Bolger & Laurenceau, 2013)。謝他 (2023) のサンプルサイズが小さく、統計検定力が十分とはいえないため、より大規模サンプルでの追加検討が必要である。

以上を踏まえて、愛着傾向が親密な関係の日常生活における様々な脅威に対する感情と対処行動との関連を明らかにするために、統計検定力に基づいてサンプルサイズを決定し、生態学的妥当性の高い経験サンプリングデータから知見を得る必要がある。これにより、成人期の愛着傾向に対する、より包括的な理解が得られるだろう。

引用文献

- Arriaga, X. B. (2001). The ups and downs of dating: Fluctuations in satisfaction in newly formed romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 754–765. <http://dx.doi.org/10.1037/0022-3514.80.5.754>
- Arriaga, X. B. (2013). An interdependence theory analysis of close relationships. In J. A. Simpson & L. Campbell (Eds.), *The Oxford Handbook of Close Relationships* (pp. 39–65). New York, NY: Oxford University Press. <http://dx.doi.org/10.1093/oxfordhb/9780195398694.013.0003>

- Babcock, J. C., Jacobson, N. S., Gottman, J. M., & Yerington, T. P. (2000). Attachment, emotional regulation, and the function of marital violence: Differences between secure, preoccupied, and dismissing violent and nonviolent husbands. *Journal of Family Violence*, 15(4), 391–409. <https://doi.org/10.1023/A:1007558330501>
- Braithwaite, S., & Holt-Lunstad, J. (2017). Romantic relationships and mental health. *Current opinion in psychology*, 13, 120–125. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2016.04.001>
- Brandão, T., Matias, M., Ferreira, T., Vieira, J., Schulz, M. S., & Matos, P. M. (2020). Attachment, emotion regulation, and well-being in couples: Intrapersonal and interpersonal associations. *Journal of personality*, 88(4), 748–761. <https://doi.org/10.1111/jopy.12523>
- Bolger, N., & Laurenceau, J.-P. (2013). *Intensive longitudinal methods: An introduction to diary and experience sampling research*. Guilford Press.
- Buss, D. M. (2000). *The dangerous passion: Why jealousy is as necessary as love and sex*. Free Press.
- Collins, N. L., Ford, M. B., Guichard, A. C., & Allard, L. M. (2006). Working Models of Attachment and Attribution Processes in Intimate Relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32(2), 201–219. <https://doi.org/10.1177/0146167205280907>
- Crowell, J. A., Fraley R. C., & Roisman, G. I. (2016). Measurement of individual differences in adult attachment. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (3rd ed., pp. 598–635.). New York, NY: Guilford Press.
- Feeney, J. A. (1995). Adult attachment and emotional control. *Personal Relationships*, 2(2), 143–159. <https://doi.org/10.1111/j.1475-6811.1995.tb00082.x>
- Gillath, O., Karantzas, G. C., & Fraley, R. C. (2016). *Adult attachment: A concise introduction to theory and research*. Academic Press.
- Griffin, D. W., & Bartholomew, K. (1994). Models of the self and other: Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67(3), 430–445. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.67.3.430>
- Guerrero, L. K. (1998). Attachment-style differences in the experience and expression of romantic jealousy. *Personal Relationships*, 5, 273–291. <https://doi.org/10.1111/j.1475-6811.1998.tb00172.x>
- Gustavson, K. A., Alexopoulos, G. S., Niu, G. C., McCulloch, C., Meade, T., & Areán, P. A. (2016). Problem-Solving Therapy Reduces Suicidal Ideation In Depressed Older Adults with Executive Dysfunction. *The American journal of geriatric psychiatry : official journal of the American Association for Geriatric Psychiatry*, 24(1), 11–17. <https://doi.org/10.1016/j.jagp.2015.07.010>
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52(3), 511–524. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.52.3.511>
- Huelsnitz, C. O., Farrell, A. K., Simpson, J. A., Griskevicius, V., & Szepeswol, O. (2018). Attachment and jealousy: Understanding the dynamic experience of jealousy using the response escalation paradigm. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 44(12), 1664–1680.

- <https://doi.org/10.1177/0146167218772530>
- 石毛 遥 (2012). 大学生の愛着の四類型と感情制御の関連について 日本教育心理学会第 54 回総会 発表論文集, 254.
- 金政 祐司 (2006). 恋人関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について 社会心理学研究, 22 (2), 139–154. <https://doi.org/10.14966/jssp.KJ00004412247>
- 金政 祐司・浅野 良輔・古村 健太郎 (2017). 愛着不安と自己愛傾向は適応性を阻害するのか?—周囲の他者やパートナーからの被受容感ならびに被拒絶感を媒介要因として— 社会心理学研究, 33 (1), 1–15. <https://doi.org/10.14966/jssp.1618>
- 金政 祐司・古村 健太郎・浅野 良輔・荒井 崇史 (2021). 愛着不安は親密な関係内の暴力の先行要因となり得るのか?—恋人関係と夫婦関係の縦断調査から— 心理学研究, 92 (3), 157–166. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.92.20013>
- 神野 雄 (2016). 多次元恋人関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 25 (1), 86–88. <https://doi.org/10.2132/personality.25.86>
- 神野 雄 (2017). 架空の浮気場面への予測行動尺度の信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 26 (2), 140–153. <https://doi.org/10.2132/personality.26.2.11>
- Kawamichi, H., Sugawara, S. K., Hamano, Y. H., Makita, K., Matsunaga, M., Tanabe, H. C., Ogino, Y., Saito, S., & Sadato, N. (2016). Being in a Romantic Relationship Is Associated with Reduced Gray Matter Density in Striatum and Increased Subjective Happiness. *Frontiers in psychology*, 7, 1763. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2016.01763>
- 古村 健太郎・戸田 弘二 (2008). 親密な関係における対人葛藤 北海道教育大学紀要(教育科学編), 58 (2), 185–195. <https://doi.org/10.32150/00005704>
- 古村 健太郎・戸田 弘二 (2020). 助け合いとしてのアタッチメント 心理学評論, 63 (3), 263–280. https://doi.org/10.24602/sjpr.63.3_263
- 久保 沙織 (2022). 『教育心理学研究』における測定・評価・研究法の研究動向と展望—共分散構造分析の適用実態の概観を中心に— 教育心理学年報, 61, 133–150. <https://doi.org/10.5926/arepj.61.133>
- Kuncewicz, D., Kuncewicz, D., Mroziński, B., & Stawska, M. (2021). A combination of insecure attachment patterns in a relationship and its quality: The role of relationship length. *Journal of Social and Personal Relationships*, 38(2), 648–667. <https://doi.org/10.1177/0265407520969896>
- Mikulincer, M., & Nachshon, O. (1991). Attachment styles and patterns of self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61(2), 321–331. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.61.2.321>
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2005). Attachment theory and emotions in close relationships: Exploring the attachment-related dynamics of emotional reactions to relational events. *Personal Relationships*, 12(2), 149–168. <https://doi.org/10.1111/j.1350-4126.2005.00108.x>
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2007). *Attachment in Adulthood: Structure, Dynamics, and Change*. New York, NY: Guilford Press.

- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2016). *Attachment in Adulthood, Second Edition: Structure, Dynamics, and Change*. New York: The Guilford Press.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2019). Attachment orientations and emotion regulation. *Current Opinion in Psychology*, 25, 6–10. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2018.02.006>
- Monti, J. D., & Rudolph, K. D. (2014). Emotional awareness as a pathway linking adult attachment to subsequent depression. *Journal of Counseling Psychology*, 61(3), 374–382. <https://doi.org/10.1037/cou0000016>
- Muthén, L. K., & Muthén, B. O. (2017). *Mplus Users Guide*. 8th ed. Los Angeles, CA.
- 永井 智・坂 征拓・田中 真理・設楽 紗英子 (2006). 愛着の四類型から見た感情抑制 パーソナリティ研究, 19 (1), 72–75. <https://doi.org/10.2132/personality.19.72>
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19–27. <https://doi.org/10.15017/3567>
- Remen, A. L., Chambless, D. L., & Rodebaugh, T. L. (2002). Gender differences in the construct validity of the Silencing the Self Scale. *Psychology of Women Quarterly*, 26(2), 151–159. <https://doi.org/10.1111/1471-6402.00053>
- Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A. M. (2003). Interdependence, interaction, and relationships. *Annual Review of Psychology*, 54, 351–375. <http://dx.doi.org/10.1146/annurev.psych.54.101601.145059>
- Rusbult, C. E., Yovetich, N. A., & Verette, J. (1996). An interdependence analysis of accommodation processes. In G. J. O. Fletcher & J. Fitness (Eds.), *Knowledge structures in close relationships: A social psychological approach* (pp. 63–90). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Sheinbaum, T., Kwapil, T. R., Ballespi, S., Mitjavila, M., Chun, C. A., Silvia, P. J., & Barrantes-Vidal, N. (2015). Attachment style predicts affect, cognitive appraisals, and social functioning in daily life. *Frontiers in Psychology*, 6, 296. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2015.00296>
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59–73. <http://hdl.handle.net/11150/10815>
- Shorey, R. C., Cornelius, T. L., & Bell, K. M. (2008). A critical review of theoretical frameworks for dating violence: Comparing the dating and marital fields. *Aggression and Violent Behavior*, 13(3), 185–194. <https://doi.org/10.1016/j.avb.2008.03.003>
- 謝 新宇・相馬 敏彦・古村 健太郎・金政 祐司 (2023) 親密な関係における相互作用と感情に対する愛着傾向の調整効果 : Dynamic APIM モデルを用いて 日本グループ・ダイナミクス学会第 69 回大会発表論文集, 134.
- 周 玉慧・深田 博己 (2017). 夫婦関係に及ぼす葛藤対処方略の影響 : 行為者－パートナー相互依存モデルに基づく検討 対人コミュニケーション研究, 5, 1–22. <https://doi.org/10.51095/taikomiyu.05.01>
- 相馬 敏彦 (2018). 二人の相互作用に潜む DV リスク : 一次予防の必要性 青少年問題, 65, 22–27.

- Tan, R., Overall, N. C., & Taylor, J. K. (2012). Let's talk about us: Attachment, relationship-focused disclosure, and relationship quality. *Personal Relationships*, 19(3), 521–534. <https://doi.org/10.1111/j.1475-6811.2011.01383.x>
- 田中 真理・永井 智・坂 征拓・設楽 紗英子 (2012). 大学生における愛着と感情制御との関連 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 439.
- White, G. L., & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. Guilford Press.
- Winterheld H. A. (2016). Calibrating Use of Emotion Regulation Strategies to the Relationship Context: An Attachment Perspective. *Journal of Personality*, 84(3), 369–380. <https://doi.org/10.1111/jopy.12165>
- Xie, X., Koike, M., Fukui, K., & Nakashima K. (2022) The preliminary study for the process from attachment anxiety to physical aggression: The escalation theory of domestic violence. *Hiroshima Psychological Research*, 21, 43–58. <https://doi.org/10.15027/52173>
- Xie, X., Koike, M., & Nakashima K. (2023) From attachment anxiety to physical aggression: A replication study on married couples. *Hiroshima Psychological Research*, 22, 83–96. <https://doi.org/10.15027/53684>